

---

# 扉の向こうに

雨砂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

扉の向こうに

### 【Nコード】

N3970C

### 【作者名】

雨砂

### 【あらすじ】

ごくごく普通の女子中学生だった菜末。ある日学校で見つけた不思議な扉に彼女の冒険心がうずきだす……。しかし扉の向こうに待ち受けていたのは壮絶な生き残りバトルだった。「普通」の女の子の勇気と友情を描く冒険ファンタジー

## 発見

「キヤアッ！」

手がジンジンする。

膝小僧に痛みがある。

「菜未！？どうしたの？」

「痛っ…転んだだけ」

体を動かして立とうとすると、石が制服から出た素肌をこすって痛い。

「大丈夫っ？そこ石いっぱいあるから……怪我ない？」

「うん、すりむいただけだから」

しかし自分の足を見下ろすと、薄く血が滲んでいた。

「保健室、行った方がいいんじゃない？そこで転ぶと石入って危ないから」

遠くで梨恵湖が箒と地面から目をはなして私に呼び掛けた。

「いい、大丈夫。石は入ってないし」

たいしたことない。

それに今保健室に行ったら、帰りが遅くなるかもしれない。  
今日はせつかく部活がない日なんだから、はやく帰って遊びたか  
った。

私は立ち上がりながら、まだ私を心配そうにみている茉莉歌に、  
大丈夫　と言うように笑ってみせた。

茉莉歌はまだチラチラと私の膝の傷をみていたけど、箒を振り回  
すようにして掃除をしている梨恵湖の方に歩いていった。

校舎裏、校舎に半分隠された太陽から、いつもの半分の光を受け  
る。

私は視線を下ろすと、転ぶ前にみていたものを再び見つめた。  
四角い箱のように、校舎のへこんだコーナーにひつついている。

校舎と同じクリーム色の壁、素材も同じだ。

中が空洞なことを示すように銅の錆びた扉がついている。

少し腰を屈めて、扉を手でなぞるようにさわる。

腰をのばして指をみると、黒く汚れていた。

この扉に興味を持つ人は長い間いなかったみたいだ。

そう思うと、何故か背筋がゾクゾクとした。

ピラミッドの入り口を見つけたインディ・ジョーンズかのように  
興奮した。

扉をじっくりみると南京錠がかけてある。

そうこなくつちゃ、無防備な壁なんて壊す価値がない。

これこそ冒険、私は昔読んだ小説のトレージャーハンターにでも  
なった気分で、しゃがみこんで鍵を凝視した。

箱のような校舎への付着物　　と言っているのかわからないけど

その壁に緑色の金属の細い板が留められている。

板には穴があがっていて、その中に扉についているこれまた緑色の  
金属の突起がおさまっていて、ひとひねりしてある。

突起は輪状になっていて、そこに南京錠が通してあった。

鍵番号は何だろう　　それこそ、探偵にでもなったつもりで

南京錠をひっくりかえし、鍵番号がついているであろう場所をみた。ない……本来そこに記されているはずの鍵番号はなく、表面はツルツルテンだった。

今まで見た南京錠には必ず鍵番号があった。一年生のときみんなが避ける一番に来てしまつて、部室の扉をあけるのは大体私だった。

ただ、一回だけ扉を閉める鍵がわりに使われていた南京錠が開かなくなつて、焦つたことがある。

そのときは次に来た先輩に、鍵と南京錠の鍵番号が違うから鍵が違うんだよ、と教えてもらつて一件落着だった。

しかしこの南京錠には鍵番号がない。

逆に胸が高鳴つた。

そのときの私には謎は多いほど嬉しかった。

もちろん鍵がないと南京錠は開かない。

でもそれを開ける、それこそが冒険なのだ。

扉を開けた向こうには未知の世界が詰まっている。

大袈裟じゃなく、私は想像した。

ターターターターターター……

ふざけたような機械音が私のふくらんだ空想世界を壊した。掃

除の終わりを告げる音楽だ。

「菜未ー帰るよつと。あー全然掃除してなかつたなー」

梨恵湖は踊るようにして歩いていき、せっかく集めたちりとりの中身を半分以上落としていた。

とおりかかった茉莉歌の視線を感じたので、私は立ち上がり、梨恵湖の後を追い掛けていった。

茉莉歌が自分の隣を走り去るのを確認し、もう一度ふりかえつた。

やっぱり……。

まだ麻痺した痛みがのこる膝小僧を見下ろす。

石が多いところで転んだはずなのに傷口についてるのはさらさらとした砂だけで、小石はほとんどついていなかった。

今、扉の方をふりかえると、扉の前だけ石が妙に少なかった。

それに転んだときのあのくすぐられるような……ひっぱられるような感覚。

あの扉には何か秘密がある。

空想ではなく思っていた。

## 拒絶

放課後、部活も無い。

家にも帰らず、何故私はこんなとこにいるのだろう。

昔から好奇心旺盛な子だと言われたものだ。

幼いころ、おじいちゃんの日刀コレクションにさわって怒られることもしばしばだった。小さい目には、キラリと光る鋭利な刃が、キラキラ光る宝物に見えたのだろう。

今、目の前にあるこの扉は、難破船の宝箱のように私を誘った。

南京錠をぐいと引つ張って揺らしてみた。

扉の金属とふれあつてガチャガチャと音をたてるだけだった。

手に金属のにおいが残っていた。

そのまま手を扉の下に這わせる。

わずかな隙間だった。

指がちょうど入らない大きさ。

それでも指先が感じる風は、指を誘っていた。

突然それが変化した。

足元を踊っていた風も、扉の方へぐんぐんと向かっているのが、靴を隔てた足先にもわかる。

扉の下の隙間に這わせた手は、今や痛みを訴えていた。

慌て外そうとすると、外せない。

激しくなる風に逆らい、腰をくの字に曲げて思いきり引つ張ると、しりもちをつきながらもなんとか指を抜くことができた。

人指し指のはらは、真っ赤になってふたすじの線がついていた。

そんなことは関係ない、とでも言うかなように、風はおさまっていた。

制服のスカートについた砂をはらい、立ち上がると、沈みかけた太陽と目があった。

私は家に戻ることにした。  
対戦準備だ。  
素手で戦える相手じゃない。

針金、はすぐにはみつからなかったから、クリップ。  
カッター、ペンチ、それに小刀。

これは昔おじいちゃんが私に買ってくれた。

「心配するから、お母さんたちには内緒だよ」その約束を密かに  
守って、机の下の宝箱に隠してあった。

まあ使わないから適当に放りこんでおいただけかもしれないけど。  
とにかくそんな品々を持って、私は明日に備えた。

次の日、頭まで被ったふとんの中にしかけた爆弾。

その名も目覚まし時計を素早くとめ、私はいつもよりはやく身支  
度をはじめた。

家を出るとき、「もう出るの？」というお母さんの言葉を「日直  
だから」とかわし、学校へ向かった。

学校の時計台、針は正確で、六時辺りをうるついていた。  
普段ならありえない。

わざわざこんな早起きまでして、朝から掃除場所に直行、なんて。  
それでも私はまた、あの扉の前に立っていた。

この扉には、文字通り「引き寄せられる」何かがあるんだ。

「開けゴマ」

て、自分。馬鹿か。

そこでさっそくクリップを取り出して、鍵穴に入れて動かしてみ  
る。

だけど、それでカチャって開いちゃうのは映画な中の話しで、開きはしないのが現実だった。

ペンチでひねってみるも、力及ばず、またしりもちをついてしまっただけだった。

仕方がないので、ペンチをポケットにしまい、カッターを取り出した。

かんざき なみ。お母さんのまるっこいひらがなで書いてある。

相当な年代モノだ。

私はため息をつくとき、それを地面においた。

ポケットをさぐると、最後の頼みの綱が出てきた。

おじいちゃんの小刀。

信じているわけでもないが、それを細いところにあてがい、力を加えてみた。

何とも言えない音がなった。

これが金属が切れる音らしい。

私はまじまじと小刀を見つめた。

驚きながらも感謝して、それに元通りにキャップをかぶせた。

鍵を奪われた無防備な扉。

私はついに手をのばし、扉を開いた。

扉の向こう。

そこに拒絶はなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3970c/>

---

扉の向こうに

2010年10月10日02時08分発行